

大学生における孤独感を構成する要因に関する検討

早稲田大学大学院文学研究科 大塚 泰 正

The examination of factors constructing loneliness in college students

Yasumasa Otsuka (*Graduate School of Literature, Waseda University*)

The effects of dispositional and sociodemographic factors on two constructs of loneliness (conformity and independence) were examined in this study. With a sample of 359 college students, analysis of variance and canonical correlation analysis were performed. Results suggested some unique characteristics of loneliness in adolescents which were; a) relatively 'maladaptive' subjects (having external locus of control, having less friends or no close one with opposite sex, and being freshmen in college) did not feel conformity, and b) no factor except sex differences influenced on independence.

Key Words: Loneliness, conformity, independence, locus of control.

はじめに

青年期は、子供から大人へと向かう過渡的な時期であり、身体的発達や知的発達が著しい反面、情緒的には緊張が強く、不安定で動揺が激しい、などの特徴が認められる。このような特徴を有する青年期においては、孤独感とその主要な感情であると言われているが、その理由として落合(1989)は、次の3点を挙げている。

まず第1の理由は、孤独感が、自我の発達に伴い、必然的に感じるものであるという点にある。すなわち、自我の確立を模索する過程で生起する情緒的な不安定さや敏感さにより、彼らは孤独感を感じるのである。第2の理由は、青年の理想を求めるという対人関係上での特徴が、孤独感を感じさせるという点にある。彼らは、自分を全面的に理解してくれる理想的な理解者を探求する傾向がある。しかし、この探求は不満足な結果に終わることが多く、そのために孤独感を感じるようになる。第3の理由は、青年は、広い時間的展望の中で、自己を位置付けることが困難なため、その結果として孤独感を感じると

いう点にある。彼らは、一生を展望するほどの時間的展望を有しておらず、現在の自分を、一生または歴史という時間的連続の中での一点として位置付けることができない。このことが、自分はこの世界に無意味に投げ出されているという被投感を生起させ、孤独感を感じさせるのである。

以上の点から、孤独感は青年期の主要な感情であると考えられるが、孤独感の定義に関しては、研究者により様々に異なることが指摘されている。Peplau & Perlman (1982 加藤監訳, 1988) は、孤独感に関する従来の定義をまとめ、それらの共通点として、社会的関係の欠如を取り上げている。この点に関して、長田・大橋(1992)は、孤独感が社会的関係、とりわけ人間関係と関連する現象であると指摘している。また、落合(1989)は、孤独感の原因を心理的立場から論じた研究の多くは、対人関係面を強調していることを明らかにしている。この様に、従来の孤独感の捉え方は、特に対人関係に基づく対他的側面を重視していると言える。

これに対して、落合(1989)は、哲学的立場からの論究では、孤独感を、対他的側面、対自的側面、時間的展望の側面の3つの側面から捉えていること

に注目し、哲学以外の領域での研究も、概ねこの3つの側面に分類することが可能であると述べ、対他的側面からのみ孤独感を捉えるのは一面的であると指摘している。その上で、落合(1989)は、孤独感の規定因に関する探索的研究から、青年期の孤独感には、対他的側面の他に、対自的側面も重要な役割を果たしているとして述べている。この対自的側面は、従来の研究では強調されなかった側面であり、青年期の孤独感をより多面的に捉えることを可能にする新たな知見であると言える。

落合(1989)によれば、この対自的側面は、青年期になってはじめて孤独感を構成する要因の一つとなる。彼は、中学生、高校生、大学生を対象とした調査から、中学生における孤独感、対他的側面のみで構成されているが、高校生、大学生になるにつれて、次第に対自的側面が明瞭に現れるようになり、孤独感の構造は2次元化していくと報告している。これは、孤独感を構成する一つの次元である対自的側面が、自我の発達に伴い必然的に感じるものであることを示している。

ところで、Peplau & Perlman (1982 加藤監訳, 1988)は、孤独感を生起させる要因として、次の2点を指摘している。第1の要因は、実際の社会的関係の変化、あるいはその関係に対する個人の要求、ないし願望の変化である。実際の社会的関係の変化は、日常生活上のストレスの一つと考えることができ、例えば、大学新入生にとっての入学というイベントは、一時的に孤独感を増大させる変化であることが指摘されている(工藤・西川, 1983)。第2の要因は、様々な個人的、および状況的要因である。個人的要因に関しては、孤独感が、自己の運命を統制できないという信念や悲観主義と結びついていることが指摘されている。例えば、Jones (1982 加藤監訳, 1988)は、大学生における孤独感、様々な社会的疎外の指標、外的統御性、一般化した敵意、などと関連していることを明らかにしている。一方、状況的要因に関しては、特に、対人関係の状態が挙げられており、友人や交際相手がいない状態は、孤独感を増大させることが報告されている(Jones, 1982 加藤監訳, 1988)。

以上の研究報告は、いずれも孤独感の対他的側面を重視した尺度を用いた研究であるため、落合(1989)によって明らかにされた対自的側面に関する検討は行われていない。対自的側面が、自我の発達に伴い必然的に感じるようになるならば、青年期における孤独感、発達の視点も含めて捉えられ

ねばならない。すなわち、青年期の孤独感を捉える際には、孤独感を構成する要因を、様々な要因に直接影響を受ける対他的側面と、その様な影響を受けず、発達に伴い必然的に感じるようになる対自的側面とに分けて考慮することが必要であると思われる。

以上の論議を踏まえ、本研究では、大学生の孤独感の構成要因に関して、次の2点の検討を行い、青年期における孤独感が、対他的側面と対自的側面とから構成されていることを明らかにする。

1. 孤独感に影響を与えていることが指摘されている様々な要因(性別・学年・個人的統制感・特定の異性との交際の有無・親しい友人の数)の中で、落合(1989)によって提唱された、青年期の孤独感の構成要因である対他的次元(人間の理解・共感の可能性についての考え方の次元; 以下、共感性と略記)と、対自的次元(個別性の自覚についての次元; 以下、個別性と略記)とに影響を与えている要因を明らかにする。

2. 目的1で明らかになった要因が、共感性・個別性に与える影響の差異と、それら相互の関連とを検討する。

方 法

1. 調査対象者

早稲田大学の1年生から4年生までの学生381名を対象に調査を実施した。そのうち、1問以上記入もれがあったものを除外した359名(男性161名、平均年齢19.4歳、 $SD=1.83$; 女性198名、平均年齢19.5歳、 $SD=1.53$)を分析対象者とした。有効回答率は94.2%であった。

2. 調査時期

1996年4月15日から5月8日にかけて、講義時間の一部を用いて、集団で調査を行った。質問項目を調査者が1問ずつ読み上げる形式で行い、全項目終了後その場で調査票を回収した。なお、調査は無記名で行った。

3. 調査尺度

孤独感尺度 落合(1989)により作成された孤独感類型判別尺度(Loneliness Scale by Ochiai; 以下、LSOと略記)を使用した。落合(1989)は、青年期における孤独感、共感性と、個別性の2次元で構成されていることを見出した。落合(1989)は、さらに、共感性と個別性との組み合わせにより、共

感性が高く、個性が低い A 型（他人との融合状態での孤独感）、共感性が低く、個性も低い B 型（理解者の欠如としての孤独感）、共感性が低く、個性が高い C 型（他人からの孤絶状態での孤独感）、共感性が高く、個性も高い D 型（独立態としての孤独感）の 4 つの類型に孤独感を分類している。本尺度は、共感性 9 項目と、個性 7 項目の全 16 項目で構成されている。評価は 5 件法であり、「はい」「どちらかというとはい」「どちらともいえない」「どちらかというといいえ」「いいえ」のいずれか 1 つに○をつける形で行った。Table 1 に本尺度の項目例を示した。なお、本尺度の併存的妥当性の検証のための併存尺度の一つとして、Russell, Peplau, & Cutrona (1980) によって作成された The revised UCLA loneliness scale（以下、UCLA-LS と略記）が用いられた。本尺度は、孤独感のうち対人関係に関わる内容のみを尺度項目として取り上げている。この結果、共感性と UCLA-LS との間には高い相関が見られたが、個性と UCLA-LS との間には明確な関連は見いだされなかった。このことについて、落合 (1989) は、個性の自覚の次元は、孤独感の構造や定義や構造が明確にされないまま作成された既存の尺度にはない新しい知見であると考察している。

Locus Of Control 尺度 鎌原・樋口・清水 (1982) によって作成された Locus Of Control 尺度（以下、LOC と略記）を使用した。本尺度は、行動と強化の随伴性、あるいは、強化の統制可能性を測定するためのものである。本尺度は 18 項目で構成されている。評価は 4 件法であり、「そう思わない」「ややそう思わない」「ややそう思う」「そう思う」のいずれか 1 つに○をつける形で行い、「そう思わない」と答えるほど、自分の行動は他人によってコントロールされているという外的統御性を感じていると評定された。Table 1 に本尺度の項目例を示した。

Table 1 各尺度の項目例

尺度名	代表的な項目
LSO (共感性) (個性)	<ul style="list-style-type: none"> 私の考えや感じを何人かの人はわかってくれると思う。 私のことをまわりの人は理解してくれると感じている。 人間は、本来、ひとりぼっちなのだと思う。 結局、自分はひとりでしかないと思う。
LOC	<ul style="list-style-type: none"> あなたは、何でも、なりゆきにまかせるのが一番だと思いますか。 あなたの人生は、運命によって決められていると思いますか。

4. 分析方法

第 1 の目的に関しては、孤独感との関連が示されてきた様々な要因（性別・学年・LOC・特定の異性との交際の有無・親しい友人の数）を独立変数、孤独感を構成する要因である共感性・個性を従属変数とする 10 通りの一元配置分散分析を行った。各要因の水準に関しては、以下の通りである。性別については、男性 ($N=161$) と女性 ($N=198$) とに分類した。学年については、大学 1 年生 ($N=186$) と、大学 2 年生以上 ($N=173$) とに分類した。LOC については、全調査対象者の LOC 得点の平均値よりも高い LOC 得点を示している Internal Control 群 ($N=188$) と、全調査対象者の LOC 得点の平均値よりも低い LOC 得点を示している External Control 群 ($N=171$) とに分類した。特定の異性との交際の有無については、現在交際を持っている群 ($N=105$) と、現在交際を持っていない群 ($N=254$) とに分類した。親しい友人の数については、親しい友人の数が 0 人の群 ($N=6$)、1～9 人の群 ($N=163$)、10～19 人の群 ($N=123$)、20～29 人の群 ($N=44$)、30 人以上の群 ($N=23$) に分類した。

第 2 の目的に関しては、目的 1 において共感性・個性に影響を与えていることが明らかになった要因を説明変数群、共感性・個性を基準変数群とする正準相関分析を行った。

結 果

1. 共感性・個性に影響を与える要因について

分散分析の結果、独立変数として取り上げた全ての変数が、共感性・個性のいずれかに影響を与えていることが明らかになった (Table 2)。以下に、共感性、個性それぞれに影響を与えていた要因について、結果を検討する。

Table 2 分散分析の結果

	共感性 平均値 (SD)	F 値	個別性 平均値 (SD)	F 値
性別				
男性 (N=161)	7.55 (7.58)	5.51 *	3.79 (4.80)	18.83 ***
女性 (N=198)	9.32 (6.66)		5.95 (4.58)	
学生				
1年生 (N=186)	7.12 (7.44)	15.64 ***	5.08 (4.91)	0.15
2年生以上 (N=173)	10.05 (6.45)		4.88 (4.68)	
LOC				
Internal Control (N=188)	10.88 (5.48)	48.16 ***	4.12 (4.86)	13.00 ***
External Control (N=171)	5.95 (7.87)		5.92 (4.58)	
特定の異性との交際の有無				
有 (N=105)	11.50 (4.91)	27.60 ***	4.19 (4.95)	4.04 *
無 (N=254)	7.30 (7.55)		5.31 (4.70)	
親しい友人の数				
0人 (N= 6)	7.33 (7.80)	9.43 ***	8.00 (2.24)	0.72
1～9人 (N=163)	7.93 (7.34)		5.12 (4.65)	
10～19人 (N=123)	9.63 (5.83)		4.75 (4.75)	
20～29人 (N= 44)	9.32 (7.63)		4.80 (5.19)	
30人以上 (N= 23)	9.43 (5.32)		4.83 (5.47)	

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

共感性に関しては、性別・学年・LOC・特定の異性との交際の有無・親しい友人の数の効果が有意であった（それぞれ $F(1,357) = 5.51, p < .05$; $F(1,357) = 15.64, p < .001$; $F(1,357) = 48.16, p < .001$; $F(1,357) = 27.60, p < .001$; $F(4,354) = 9.43, p < .001$ ）。親しい友人の数については、LSD法を用いた多重比較の結果、親しい友人の数が0人と1～9人、0人と10～19人、0人と20～29人、0人と30人以上、1～9人と10～19人の間に有意差がみられた ($MSe = 46.75, 5\%$ 水準)。

個別性に関しては、性別・LOC・特定の異性との交際の有無の効果が有意であった（それぞれ $F(1,357) = 18.83, p < .001$; $F(1,357) = 13.00, p < .001$; $F(1,357) = 4.04, p < .05$ ）。

2. 共感性・個別性を基準変数とする 正準相関分析の結果

結果1で、全ての独立変数が共感性・個別性に影響を与えていることが明らかになったため、今回取り上げた変数の全てを説明変数群として採用した。正準相関分析の結果を Table 3 に示す。その結

果、2つの成分が抽出され、次の2点が明らかになった。

(a) 外的統御性を感じており、特定の異性との交際がなく、大学新入生であり、親しい友人の数が少ない者は、共感性が低いこと、(b) 女性は、その他の要因にかかわらず個別性が高いこと。

考 察

本研究結果から、共感性と個別性は青年期におけ

Table 3 正準相関分析の結果

変 数 名	成分1	成分2
X1 性別	-0.230	0.944
X2 学年	-0.406	0.202
X3 LOC	0.854	0.189
X4 特定の異性との交際の有無	0.536	0.011
X5 親しい友人の数	-0.300	0.036
Y1 共感性	-1.000	0.029
Y2 個別性	0.383	0.924
正準相関係数	0.500 ***	0.307 ***

*** $p < .001$

る孤独感の異なる側面を表していることが確認された。共感性は、様々な要因によって影響を受けるものであるのに対して、個別性は、青年期になれば、多くの人々に共通に感じられるようになるものと言える。正準相関分析の結果、共感性は、LOC・特定の異性との交際の有無・学年・親しい友人の数の影響を受けていたが、個別性は、性別の影響しか受けていないことが明らかになった。以下に、共感性・個別性の各々について考察する。

まず、共感性に関しては、大学新入生は、2年生以上に比べ、共感性が低いことが明らかになった。正準相関分析の結果、成分1において、学年は、LOC、特定の異性との交際の有無に次ぐ構造係数を有していた。この結果は、大学が始まって2週間後、新入生の75%が、少なくとも一時的な孤独感を経験していたというCutrona (1982 加藤監訳, 1988)の結果を支持するものである。

しかし、本研究では、大学2年生以上になると、有意な共感性の増大が認められたことから、多くの大学新入生が入学直後に感じる孤独感は、一時的なものであると言え、彼らは、学年の終わりまでには十分大学生活に適應し、共感性を高めることができると考えられる。Cutrona (1982 加藤監訳, 1988)は、大学新入生のうち、孤独感を克服することができた者は、友人関係に満足しているということを示していることから、大学新入生は、新たな生活場面において、満足できる友人関係をつくりあげることによって、一時的に低下した共感性の回復を図っていると言える。換言すれば、彼らが満足できる友人関係を作り上げられない場合には、共感性の低下は回復されないとと言える。

また、外的統御性を感じていることも、共感性を低下させる重要な要因であることが明らかになった。これは、外的統御性を感じていることが、積極的な対人関係の形成を抑制していることが原因であると考えられる。Rotter (1966)は、行動の生起可能性を決定するのは、単に外的強化が与えられたか否かではなく、強化の受け手が、その強化を何と随伴したものと認識するか、換言すれば、何がそれを招いたと認識するかが大きな要因であると指摘している。つまり、外的統御性を感じている者は、自分に与えられた強化が、他人によって引き起こされたものと認識するため、その結果、他人に関わろうとする試みが少なくなると考えられた。Cutrona (1982 加藤監訳, 1988)は、大学新入生を対象とした縦断的研究から、長期間孤独感に陥っていた学生

は、社会的関係を持つための積極的な努力を抑制する態度で大学生活を始めていたことを明らかにした。このような態度は、特定の異性との交際や、親しい友人をつくることを困難にしていると考えられる。本研究では、正準相関分析の結果、共感性に影響を与える要因として、LOCの他に、特定の異性との交際の有無、親しい友人の数も見出された。特定の異性との交際がないことや、親しい友人の数が少ないことが、共感性の低下を促進している背景には、LOCの影響があると考えられる。外的統御性を感じている者は、積極的に恋人や友人を得ようとはしないために、そのような関係を築くことが難しい。しかし、彼らは、恋人を見つけることが、常に自分たちの孤独感を克服する唯一の方法であると考えている(Cutrona, 1982 加藤監訳, 1988)ため、対人関係面での欲求レベルと充足レベルの食い違い(工藤・西川, 1983)が生じる結果、共感性を低下させると考えられる。

一方、個別性は、全ての青年に同程度感じられているものであると考えられる。正準相関分析の結果、性別のみが個別性に影響を与える要因であったことから、個別性は、様々な要因によって影響を受けにくいことが明らかになったが、これは、青年期における自己意識の高まりが、個別性の自覚を促進しているためと考えられる。Brennan (1982 加藤監訳, 1988)は、青年期には、自己意識の高まりに伴い、個別性を持つ有限な存在として自分を捉えるようになる結果、孤独感が生じると指摘している。このことから、個別性は、青年期における孤独感の構成要因のうち、自我の発達に伴って必然的に確立される側面を表すものであると考えられる。

文 献

- ブレナン, T. 加藤義明(監訳) 1988 孤独感の心理学 誠信書房 Pp.150-177.
 (Brennan, T. 1982 Loneliness at adolescence. In Peplau L.A. & Perlman, D. (Eds.) *Loneliness: A sourcebook of current theory, research and therapy*. New York: John Wiley & Sons.)
- カトロナ, C.E. 加藤義明(監訳) 1988 孤独感の心理学 誠信書房 Pp.178-201.
 (Cutrona C.E. 1982 Transition to college: Loneliness and the process of social adjustment. In Peplau L.A. & Perlman, D. (Eds.)

- Loneliness: A sourcebook of current theory, research and therapy.* New York: John Wiley & Sons.)
- ジョーンズ, W.H. 加藤義明 (監訳) 1988 孤独感の心理学 誠信書房 Pp.111-128.
(Jones, W.H. 1982 Loneliness and social behavior. In Peplau L.A. & Perlman, D. (Eds.) *Loneliness: A sourcebook of current theory, research and therapy.* New York: John Wiley & Sons.)
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 1982 Locus Of Control 尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討 教育心理学研究, 22, 99-107.
- 工藤力・西川正之 1983 孤独感に関する研究 (I) - 孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討 - 実験社会心理学研究, 22, 99-108.
- 落合良行 1989 青年期における孤独感の構造 風間書房
- 長田久雄・大橋靖史 1992 老年期の孤独感の研究について 早稲田心理学年報, 24, 91-99.
- ペプロー, L.A.・パールマン, D. 加藤義明 (監訳) 1988 孤独感の心理学 誠信書房 Pp.1-23.
(Peplau, L.A., & Perlman, D. 1982 Perspectives on loneliness. In Peplau L.A. & Perlman, D. (Eds.) *Loneliness: A sourcebook of current theory, research and therapy.* New York: John Wiley & Sons.)
- Rotter, J.B. 1966 Generalized expectancies for internal vs. external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, 80, 1-28.
- Russell, D., Peplau, L.A., & Cutrona, C.E. 1980 The revised UCLA loneliness scale: Concurrent and discriminant validity evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 472-480.